

[評価]

研究は、古代オリエント文明の東進—インド、遊牧民族圏、中園、韓国をへて日本へと渡来した文明史の流れ、その重層性を想起させる興味深い指摘である。「獅子」と「狛犬」。日本の神社・仏閣の聖域を飾る一対の聖獣のデザインの背後に潜むエジプト・オリエント諸国の聖獣信仰と造形手法に目を向け、「獅子」の流れを「ライオンの聖性」に探り、「狛犬」の姿に見え隠れする造形語法を古代の「聖牛信仰」に結びつけて考察している。この論考の高く評価すべき点は、獅子の力の表象、太陽イメージとの結びつきを示す「獅子の体表文様」の探索である。細部に刻まれ、ともすれば全体像の中に埋没しがちな体表文様、とりわけ渦巻文様の種々相は、多量の資料の重層化、その分類・整理によって、ユーラシア大陸を西から東へと移動する「聖性を示すシンボル探究」に対する興味深い一例となる。

一方で、エジプト・オリエントの牛や「一角牛と狛犬」の関係づけは、獅子ほどの説得力がないものになっている。なぜ牛の姿が消え、犬、あるいは一角の獅子へと姿を変えたのか。この問題を考えるには、日本における「牛の聖性」の位置づけはどのようなものであったのかを調べねばならない。研究の継続が期待される。

論考は、現代のグローバル文明論へのよき一例となり、また、新しい造形理念・造形語法の探究を目指す神戸芸術工科大学にとっても、重要な研究論文となると考えられる。

平成 26 年 1 月 15 日、芸術工学研究科において、審査員全員出席のもとに論文の説明を求め、周辺事項も含めて質疑応答をおこない、合議の結果、本論文執筆者は博士(芸術工学)の学位を受けるに十分な資格があることを全員一致で確認した。